3になる社会
1+1が
1
素敵だね！
コラボレーション
協働
collaboration
第14号
2004
3

第4回 ひょうごボランタリー・スクエア21開催!

平成16年1月24日（土）・25日(日)の両日にわたり、JR神戸駅周辺にて「第4回ひょうごボランタリー・スクエア21」が開催されました。このイベントは、阪神・淡路大震災を契機に大きな盛り上がりとなったボランタリー活動の定着を目的に、地域・分野・セクターを越えて団体が交流・情報交換する機会となるもので、NPO・行政・労組等県内の16団体が実行委員会を構成して実施し、今回で4回目となります。これまでの活動や画期的な企画提案に対してアワード（賞金）が贈呈されるボランティア・市民活動元気アップアワード、「企業・勤労者とNPOの連携を目指して」をテーマとしたひょうごボランティア・市民活動フォーラムなど、さまざまなイベントを開催し、両日で約1万3千人の方々にご参加いただきました。

本号では、兵庫県内の様々なボランタリー活動団体が主役のイベント、第4回ひょうごボランタリー・スクエア21の特集をお届けいたします。

神戸クリスタルタワー「ひょうごボランティア・市民活動フォーラム」

企業とNPOの連携に向けた論議が展開されました。
（詳細P．5－6）

NPO・NGO出会いのひろば

県内NPOをはじめとしたボランタリー活動団体がブースを設け、活動希望者等に自分たちの活動や取り組みをPRしました。

スペースシアター「ボランティア・市民活動元気アップアワード」

ボランタリー活動団体がこれから取り組もうとする企画の提案やこれまで取り組んできた活動をアピール。支持を多く集めた団体にアワード（賞金）が贈られました。
（詳細P．2－4）

ボランタリーステージ

スクエアの趣旨に賛同するパフォーマーたちにより、アクロバット、コンサートなど、様々な催しが行われました！

デュオぎゃらりーⅡ「地域活動パネル展」

県内の様々な地域活動・ボランタリー活動団体やアワード受賞団体がパネル等を作成し、日頃から取り組んでいる活動をアピールしました。

ふれあいマーケット

手工芸品やパン・クッキーなど、県内の小規模作業所やNPO等で製作しているさまざまな物品を販売するコーナー。2日間たくさんの人でにぎわいました！

Contents

P.1　「第4回ひょうごボランタリー・スクエア21開催!」
P.2－4　特集　「ボランティア・市民活動元気アップアワード」
P.5－6　「ひょうごボランティア・市民活動フォーラム」
P.7　プラザ通信「NPOと行政の協働会議」「平成16年度ボランティア・市民活動災害共済」　NPOスクエア
P.8　広がれ!ボランタリーネットワーク「高校生ボランティアと国際協力団体の連携」

第4回ひょうごボランタリー・スクエア21

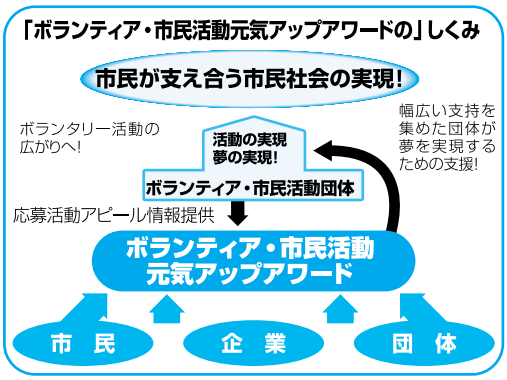
ボランティア・市民活動元気アップアワード

～市民・企業・団体とボランタリー活動団体のコラボで夢の企画が実現！～

「ボランティア・市民活動元気アップアワード」は、スクエアのメインイベントです。県内のボランティア・市民活動団体二三七団体から応募があり、一次審査を通過した二五団体が当日会場で活動PRを行いました。

このアワードのユニークな点は、ボランティア・市民活動を支えようという市民・企業・団体が協賛金を募集し、これを原資にして、ボランタリー活動団体のユニークな企画やこれまでの地道な活動実績に対して賞を与えるという仕組みをとっているところです。賞には二コースあり、これまで継続的に取り組んできた活動に対して贈られる活動実績評価型の「こつこつコース」と、「これから取り組もうとする事業等」を支援する「元気アップコース」を設置しています。「元気アップコース」ではまだ活動経験が浅い団体でも、このアワードで実現性のある画期的な企画提案を行い、審査員の多くの支持を集めれば、最高額百万円が贈られます。受賞団体は、賞金をもとに提案した企画を実施することになります。

また、「この団体を支援したい！」という市民がアワードに参加できるしくみである一般投票（こつこつコース）を行っていることも、このアワードの特徴で、市民がボランティア・市民活動に接し、活動を支えるしくみづくりを推進しています。（図参照）市民・企業・団体がアワードの原資を提供したり、応募団体のアピールを受け一人ひとりが応援したい団体に投票したりすることで、幅広い支持を集めた団体がアワードを受賞し、今後の活動への活力を得て、夢を実現していくこの仕組みは、多くの市民・企業・団体と活動団体の共通の「夢」を実現していく、コラボレーション（協働）のひとつのあり方であるといえるのではないでしょうか。



元気アップコース（企画提案型）

大賞1団体　100万円　元気アップ賞　20万円

これまでの活動のアピールと「2004年に企画している、新たな企画」を提案し、企画内容の「画期性」「実現性」「提案力・アピール性」を審査員10名が審査。1次審査を通過した5団体が、1月25日（日）にパワーポイント等を用いたステージプレゼンテーションを行いました。

元気アップ大賞　劇団ひっぽ（神戸市須磨区）

受賞対象事業　劇団「ひっぽ」のワークショップ

アルコールや薬物をはじめ、依存症の問題に関し、第1次予防活動を専門的に行っている機関は少なく、依存症という病気はまだまだ社会的に正しく理解されていません。そのため問題が深刻化して初めて露呈するケースや、相談機関や対処法がわからず、命を落とす人も多くなっています。

劇団ひっぽは、アルコール・薬物依存症の予防啓発を、身近な生の距離で伝える演劇の手法を通じて取り組む団体です。メンバーは九名、旗揚げ後四年間で、二十回近く出張公演を行ってきました。

今年計画している「劇団ひっぽのワークショップ」では、これまで演劇の観客であった中学生や高校生をはじめとする青年層に呼びかけ、約半年のワークショップを通じて、実際に啓発演劇を演じる側を体験してもらいます。依存症を、知識として知るだけではなく、依存症に関するせりふや動きを体験することにより、問題に悩む当事者や周囲の人の気持ちを理解してもらえればと考えています。

依存症啓発劇の一場面

前年度アワード受賞団体報告会

前年度に元気アップコースのアワードを受賞されただんごの会、JPCom、兵庫県移送サービスネットワーク、ブレーンヒューマニティ、姫路市介護サービス第三者評価機構の５団体の企画がどのように実現されたのか報告されました。ここでは、元気アップ大賞受賞団体の報告をご紹介します。

前年度元気アップ大賞受賞　だんごの会
受賞対象事業　ストリートヘルパー育成プロジェクト

だんごの会では、一八歳未満の障害のある人を対象にした余暇活動の支援を行っています。この度、助成金をいただけたことで念願の「集まれ中学・高校生！GO！GO！合宿」を実現することができました。参加者は一二〇名で、うち八〇名が中高生でした。内容は、障害のある中高生と障害のない中高生が共に二日間を過ごし、ゲームなどの企画を通して「障害」を超えた仲間づくりを目指すというものでした。

合宿では、衣食住を共にするとともに、ゲーム・花火・バーベキュー・スイカ割りなどの企画を一緒に楽しむことによって、お互いの理解を深めることができ、自然な雰囲気で友達になることができました。

合宿後は、反省会、おもいで交流会を開催し、その後はハイキングなどの外出企画への参加、「ストリートヘルパー」をテーマにした意見交流会と活動を続けています。

今後も同年代の仲間で出かける企画を多数用意し、友達としてつながっていけるよう応援します。

ストリートヘルパー育成プロジェクト
「集まれ中学・高校生!GO!GO!合宿」の一場面

こつこつコース（活動実績評価型）

大賞　20万円　こつこつ賞　5万円

団体結成時から現在までの活動実績を発表、「継続性」・「生活・コミュニティへの密着度」を審査。1次審査を通過した20団体がブースとステージで発表を行いました。※こつこつコースは、審査員の投票の他に、来場者が受賞団体を選ぶ一般投票を実施し、両日で280票の一般投票がありました。

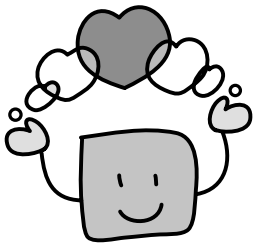
こつこつ大賞の発表
緊張の一瞬!

こつこつ大賞　プラザ5運営委員会（神戸市長田区）
活動内容：「御蔵・菅原地区の復興まちづくりと住民の支援活動」

御蔵では、休日の朝食や昼食はコンビニのお菓子で済ましている子が多いみたいです。公園が出来ましたが、自分たちでルールを決めて一緒に遊ぶ様子は昔ほど多く見られません。週に何日間か学校に行かない子もいます。勉強は体育と給食が得意と言う子はたくさんいます。そんな子どもたちと、見かけも悪く今にも崩れそうなおにぎりや卵焼き、ホットケーキを作り一緒に食べるとなんと美味しそうに頬張ることか。初めて自分で作った凧がなかなか上手く上がらないのに何度も公園を走り回る子。樟脳の結晶なんか見たことも作ったことも有りません。人間が入れるシャボン玉に感動し、ペットボトルのロケットは大人の方が楽しんでしまった…。

協働作業の楽しさ、友達と一緒にいることの温かさ、身近に自分たちの力で驚きや感動を見つけることが出来るすばらしさ。被災地ならではの子供達の悩み苦労を地域の中で見守り、地域の中で子どもたちの居場所が見つけられる取り組みこれからも続けたいと考えています。

子ども科学実験教室の一場面



アワード受賞団体の紹介

今回のアワードを受賞された団体をご紹介します。おめでとうございます！

元気アップ大賞（1団体）

・劇団ひっぽ

元気アップ賞（4団体）

・（特活）ブレーンヒューマニティー
・（特活）たかとりコミュニティセンター
・チャイルドライン神戸推進委員会
・父子手帳を作ろう会

こつこつ大賞（1団体）

・プラザ5運営委員会

こつこつ賞（19団体）

・げんきＫＯＢＥ
・（特活）女性と子どものエンパワメント関西
・阪神淡路大震災まち支援グループ
　まち・コミュニケーション
・姫路こころのケアネットワーク
・（特活）支援の会　ひまわり
・（特活）障害者情報ネットワーク尼崎
・さくらんぼの会
・KOBE在宅ケアボランティアグループ「ほほえみ」
・（特活）マザーサポートの会
・かみしばい冒険王
・加古川要約筆記　たんぽぽ
・（特活）マンション長期修繕計画研究所
・（特活）福祉ネットワーク　西須磨だんらん
・大庄北地区子ども会連絡協議会
・農・都共生ネットこうべ
・ボランティアいずみ
・神和台ネット
・兵庫県要約筆記サークル連絡協議会
・こころのケアステーション

アワードへのご協賛ありがとうございました！

ボランティア・市民活動元気アップアワードは、多くのみなさまに支えていただき開催しています。今回のアワードにご協賛いただきましたみなさまをご紹介させていただきます。　（50音順・敬称略）

アライ	ディスプレイ・ミワボシ
伊藤喜商事	土手山
エクラ	日本青年会議所近畿地区兵庫ブロック協議会
大阪ガス　兵庫リビング営業部	のじぎく筆耕業協同組合
関西電力　神戸支店	ひょうご環境創造協会
木口ひょうご地域振興財団	兵庫県共同募金会
旭成社	兵庫県芸術文化協会
近畿コカコーラボトリング	兵庫ジャーナル
きんでん労働組合　神戸支部	ひょうごセルフヘルプ支援センター
ケイ・ジェネラルプランニング	兵庫福祉保険サービス
神戸クリスタルタワーサービス	ひょうごボランタリー基金
神戸ＹＭＣＡ福祉会	三井住友海上火災保険
コープともしびボランティア振興財団	ミップ
島印刷	連合兵庫
生活協同組合コープこうべ	大林　弘子
但馬銀行上筒井支店	小林　正平

ひょうごボランティア・市民活動フォーラム

「企業・勤労者とNPOの連携を目指して」

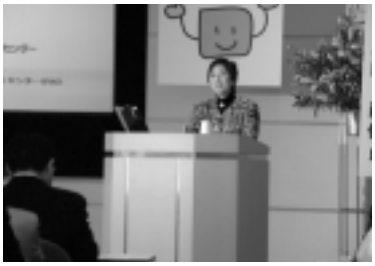
共催：勤労者マルチライフ支援事業兵庫県推進協議会

平成16年1月24日（土）クリスタルホール（神戸クリスタルタワー3階）で開催した、「ひょうごボランティア・市民活動フォーラム」の、基調講演とパネルディスカッションの概要をご紹介します。

（文責／ひょうごボランタリープラザ）

基調講演
「企業とNPOのパートナーシップ」
岸田眞代氏
（特活）パートナーシップ・サポートセンター代表理事）

NPOは活動分野がいろいろあるにしても、市民がいきいきと暮らせる社会を自分たちでつくれないだろうかと思っています。そして、そうした取り組みを事業として成り立つようにしたい、本当に自立できる事業とはいったいなんだろうかと模索をしているところが多いと思います。一方で、企業は、企業市民として、地域に根ざした事業が展開できないだろうかと考えています。行政は税収が減少する中で、公共サービスの一部を市民に担ってもらえないだろうかという思いを持っています。また、地域づくりそのものも市民と一緒にやっていけないだろうかとも思っています。こういった状況で、この三者をつなぐ役割をしたいという思いでパートナーシップ・サポートセンターを設立しました。



「基調講演の様子」

パートナーシップ大賞

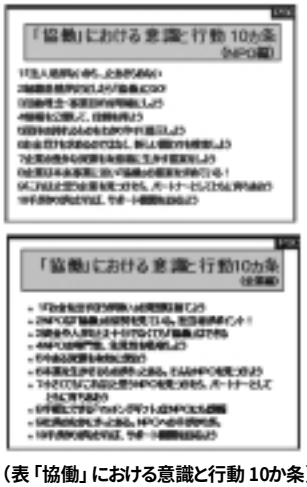
私たちは、二〇〇二年から「パートナーシップ大賞」という取り組みをしています。この目的は、企業とNPOの協働の可能性を示していくことでした。“いい企業”の評価基準をきちんと出していくことが重要ではないかと、また、従業員が働いていて本当に誇りを持てる企業とはどのような企業かを考えました。一方で、NPOの立場に立つと、ヒト、モノ、カネといった、基本的なものが足りないところがいっぱいあります。こうしたことから、企業とNPOの関わり、協働で事業を行うモデルを具体的な形で示せないかと考え、「パートナーシップ大賞」をつくりました。

いろんな分野に渡って応募がありましたが、第1回の大賞は、札幌の「車いすの集配・はこび愛ネット事業」でした。この事業が第1回の大賞を受賞したのは協働のレベルが高いと同時に、関わっているすべての人がハッピーだということが評価されました。（詳細は、別途紹介する書籍をご覧ください）

NPOと企業の協働に向けて

違いがあるからこそパートナーとして手を組むわけですから、パートナーシップの条件としては、まずは違いが認め合える相互関係づくり、二つ目は対等な関係が挙げられます。対等とはプラスを持ち寄りマイナスを補い合う補完的な関係と、同時に「批判をしあえる」こと、そして押し付け合いではなく合意に基づいた役割分担ができることです。そして大事なことはそのプロセスを愉しみあえること、いろんな問題をも成長の糧にできることです。したがって協働とは、お互いの役割とか存在意義を認め合い、引き出し、互いに持てる資源を出し合い、対等な関係の下に、そして共通の目的の下に、それぞれが成長し、社会に寄与することと定義づけました。そしてそのために、それぞれの自立が問われます。経営基盤を確立して経済的に自立することも大切ですし、しっかりとしたミッションを持つという意味での精神的な自立も重要です。また、協働しているそのプロセスを公開すること、そして、第三者による評価をきちんと受けることが本当に協働を進めていくために必要になってくると考えます。

私たちは企業の方に対し、町内会から言われたとか、お祭だからとか、しかたないから寄付金を出すではなくのではなく「同じ寄付をするなら、共感に基づく寄付をしましょう」と言っています。それから、互いの役割、存在意義を引き出しましょう、そして従業員の個性を引き出しませんかということも言っています。これまでは“隠れボランティア”のかたちでそれをオープンにすると出世できないと思っていた人たちがけっこう多かったわけですが、むしろそういった従業員が持っている個性を企業が引き出すことによって、地域社会との接点を持つ企業になっていくのではないかと思います。一方、NPOの側は組織をオープンにし、そしてお互い対等な関係を築く中で成長していくことです。これは協働の中の基本的な部分です。「協働における意識と行動」という調査をしたときにまとめたものがありますのでぜひご覧ください。



（表「協働」における意識と行動 10か条）

最後に関係維持のために必要なことを申し上げます。それは責任を組織化していくことです。最初は個人的なつながりから始まりますが、その人がいなくなれば終わりではなく、組織化し続けていくことが大切です。また、お互いにコミュニケーションをどれだけとれるか、その中で信頼を醸成していくことが大事です。事業をやっていくときは、お互いにきちんと説明し合え、外部にも説明責任を果たせることがいい関係を維持することにつながるのではないかと思います。

書籍紹介

パートナーシップ・サポートセンター　岸田眞代・高浦康有編

『NPOと企業・協働へのチャレンジ』同文舘出版（二〇〇三年）

名古屋をベースに活動するNPO法人パートナーシップ・サポートセンターが行ったパートナーシップ大賞の詳細なドキュメント。十件の事例が詳しく紹介され、審査基準や審査経過も記されている。全国から三五件の応募があり、その熱意に応えて丁寧なコメントがつけられている。

パネルディスカッション「企業・勤労者とＮＰＯの連携を目指して」

パネリスト

高石　好志氏（ソニー生命ボランティア有志の会　代表）
安村　朝昭氏（勤労者リフレッシュ事業振興財団参与・勤労者マルチライフ支援事業プランナー）
岸田　眞代氏（（特活）パートナーシップ・サポートセンター　代表理事）
黒田　裕子氏（（特活）しみん基金・KOBE　理事長）

コーディネーター

野崎　隆一氏（ひょうご市民活動協議会〈HYOGON〉代表）

○コーディネーター　野崎隆一氏
（ひょうご市民活動協議会　代表）

震災で多くの自発的な市民活動が生まれ広がりを見せていますが、復興に関わる様々な支援により支えられている部分が大きく、支援がなくなった後、これまで培ってきた活動をどうするのかということが課題となっています。市民活動がこうした支援から離陸するためには同じ民間セクターの企業との協働が重要だと思います。このディスカッションを通じポスト震災十年のボランティア・市民活動のイメージを見つけられたらと思います。

不況の中、企業防衛的な意識が非常に高く、どういうふうに協働のきっかけをつくり、関係を育てていけばいいのか知りたいＮＰＯは少なくありません。企業に対する効果的なアプローチの方法、そしてＮＰＯと企業の連携のあり方などについて語っていただきます。

○安村　朝昭　氏
（勤労者マルチライフ支援事業プランナー）

雇用形態が大きく変化する中、ボランティア活動をやっている勤労者は、企業から離れても自分の生き方を持っている自信から、ゆとりを持って企業活動をしているし、リストラされた人たちもあわてふためかず、新しい生き方を築いています。

これはボランティアという手段で人々と関わり合い、企業では実現しにくい、みんなが平等で意見を言いその中で自分の位置づけを見出せる一端だと思います。

また、大企業でいろんな不祥事が出ていますが、これはどうしても企業論理が先行してしまうことから起きたものだと思います。今後は、企業は社員を解き放して、ボランティア・市民活動のいろんな活動の中で吸収したものを企業に持ち込めば、企業ももっといきいきし、消費者の目線で物事を見ることにもつながります。

勤労者マルチライフ支援事業では企業懇談会を開催すると同時にＮＰＯとの交流会の開催を進めています。企業から見るとうさんくさく見えてしまうＮＰＯと一回お見合いをしてみましょうということです。協働をすすめていくために、企業は規模に関係なく今の社会の流れを取り込んでいく必要がありますし、それはトップの認識にかかっています。

○高石　好志　氏
（ソニー生命ボランティア有志の会　代表）

ＮＰＯが企業に協働を持ちかける場合、個人的な感覚や人間力をいかに活かしていくかを考えるほうが効率がいいと思います。ほとんどの企業の場合、総務部長は窓口という感覚しかなく、自分の心が動いたとしても対応については、個人差があります。しかし、そのような対応・考え方の温度差やお互いのやれることやれないことの補完体制が取れる企業は業績も伸びています。

ボランティアを通じ大学生との関係ができたのですが、双方のメリットがありました。大学生にとっては我々とのコミュニケーションの中で、社会人としての彼らにとっての未体験ゾーンを伝え、社会や就職に対するイメージができ、ソニーに対するイメージもまた出てくるでしょう。逆に、我々がうれしいのは、未来がこのすばらしい若者たちに託せる、そういう人たちが社会人として次の時代を背負っていくという実感で明るい気持ちになります。企業・ＮＰＯだけでなく、学生や主婦も含めた協働の広がりを考えることが重要だと思います。

○黒田　裕子氏
（（特活）しみん基金・KOBE　理事長）

企業と協働までのプロセスの中で企業とどう向き合ったら効果的に運営ができるかを考え実践しています。ＮＰＯ側の理念を確立し相手と向き合うことで、今ある問題、課題を真剣に考える関係性を紡ぐことができます。

企業と向き合う中では、一度行って断られても次に足を運ぶことが大切です。「自分が何の為に今、この問題と向き合っているか」を考え原点にかえることです。そうすることで関係性を継続することができます。また、企業の方たちがいつでもボランティア活動をできるように場を提供することも大切です。

活動にあたって、理念と責任を持って相手との信頼関係を構築することも重要なことのひとつです。

○岸田　眞代　氏
（（特活）パートナーシップ・サポートセンター代表理事）

企業とＮＰＯのアプローチとしては、私たちは「アイディア交流会」というＮＰＯにとって自分たちの足りないものや課題に対してアイディアを出してもらう場を設けています。このような場で企業の人たちがアドバイスをあげたり、場所を貸すことにつながったり、一緒にイベントをやることになったりします。中間支援団体は、積極的にそのような場をセッティングするというのが協働を進めるうえでは有功ではないかと思います。しかし、ＮＰＯとの出会いそのものが即協働につながるほど簡単ではないので、個人的なつながりや具体的な事業提案などのプラスアルファの要素が必要です。

○野崎

ＮＰＯがどうやって協働のきっかけを作ったらいいのか、アプローチをすればいいのかという課題があり、逆に企業側もＮＰＯにどうアプローチすればいいのかという課題があります。２つのセクターをうまくつないでいくためには中間支援組織が非常に大きな役割を持っているのではないかというのが、今日確認できたと思います。

パネルディスカッションの一場面

平成１６年度「ＮＰＯと行政の協働会議」におけるＮＰＯ部会幹事の募集!!

「NPOと行政の協働会議」は、県内のNPOで構成するNPO部会が行政に対して市民活動に関する様々な提案を行い、有効な施策づくりに反映させるための新しい枠組みとして、平成11年度にスタートしました。（発足時名称:「NPOと行政の生活復興会議」）

例えば、これまでに緊急雇用対策交付金事業、NPOへの業務委託のあり方、NPOへの貸付制度、行政とのパートナーシップのあり方等について議論を重ねてきました。

毎月、NPO部会及び全体会（NPO部会幹事と行政部会幹事が出席）を各1回開催しています。

また、このような会議の意義を県内の各地域で共有するため、出前出張会議等も行っています。

この会議は、「官と民の対立の場ではなく、共に考え・学び・お互いの意見を共有する場」です。

つきましては、こうした趣旨に賛同し、幹事として参画いただける方を募集しますので、ふるってご応募下さい。

1．公募人数　若干名

※幹事の役割：月１回のＮＰＯ部会と全体会へ出席いただき、関係するＮＰＯの課題などを持ち寄り、会議の結果をフィードバックしていただきます。

2．公募締切　平成 16 年 3 月 19 日（金）

3．応募方法　①団体名、②代表者氏名、③当会議に出席いただける方の職・氏名、④団体の主な活動内容、⑤当会議の幹事に応募する動機　について記載の上、FAXまたはEメールによりひょうごボランタリープラザまで申し込み願います。（様式等は問いません。）

4．事務局について

（1）NPO部会幹事のうちの1団体に担っていただきます。新幹事が内定した後、協議により決定します。

（2）事務局の役割

- 会議の日程調整・召集、行政部会との連絡・調整、議事録の作成、ホームページの運用等
- 事務局を担っていただく団体には、運営に必要な経費を支給します。

申込先

ひょうごボランタリープラザ　事業部（菅原）
〒650-0044　神戸市中央区東川崎町1-1-3神戸クリスタルタワー10階
ＴＥＬ（078）360-8845
ＦＡＸ（078）360-8848
E-mail:vplaza@hyogo-wel.or.jp
URL　http://www.hyogo-vplaza.jp/

～安心してボランティア活動をするために～

ボランティア・市民活動災害共済　新年度加入手続き開始！

主な補償内容

傷害給付
ボランティア活動中の事故によるケガの補償
（通院1日5,000円・入院1日8,000円）

賠償責任給付
ボランティア活動中に第3者の身体または財物に対する損害を与えた際の補償
（4億円限度）

見舞金
傷害給付の対象とならない事由でなくなられた際に給付
（500千円）

＊4月1日からの加入は、お早めにお手続き下さい。（3／31まで）。
＊4月1日以降は、所定の申込書と掛金を受付した翌日からの加入になります。

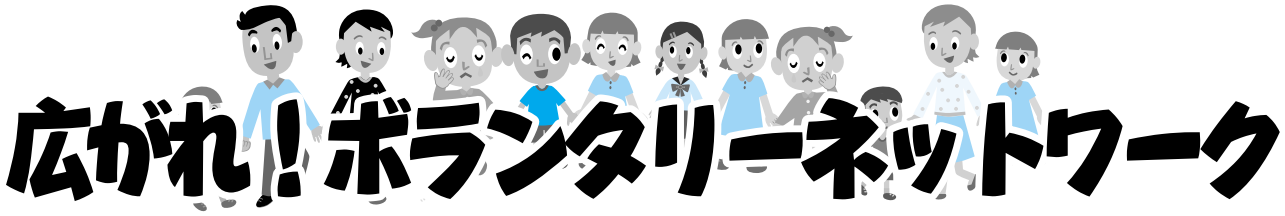
〔お問合せ・加入申込先〕最寄りの市区郡町社会福祉協議会のボランティアセンター

実施・運営主体／兵庫県社会福祉協議会ひょうごボランタリープラザ
TEL 078-360-8845　FAX 078-360-8848
取扱代理店／兵庫県福祉保険サービス
TEL 078-735-0166　FAX 078-735-1890
引受保険会社／三井住友海上火災保険株式会社
TEL 078-331-8502　FAX 078-331-5027

年間掛金1名につき
500円

ARK61/2004.02/A2

コラボレーション
●2004年3月5日発行(隔月5日発行)●編集・発行所／社会福祉法人 兵庫県社会福祉協議会 ひょうごボランタリープラザ URL http://www.hyogo-vplaza.jp
●〒650-0044 神戸市中央区東川崎町1-1-3神戸クリスタルタワー10階 TEL:078-360-8845 FAX:078-360-8848 ●発行人／辻 寛 ●編集人／小森 星児



広がれ！ボランタリーネットワーク

Vol.6 合言葉は「ハートで勝負！」
～草の根から世界まで、高校生ボランティアがつなぐ「笑顔の輪」～

県立篠山鳳鳴高等学校「インターアクト部」

●国際的な視野をもち、地域に根ざして活動

「ハートで勝負！」。フレッシュで温かく、力強さが伝わってくるこのキャッチフレーズは、高校生ボランティア活動団体、県立篠山鳳鳴高等学校インターアクト部の「合言葉」です。インターアクトのメンバーは38名、「地域社会への奉仕」と「国際交流の推進」を2本柱に活動しています。日常的には、地域の施設や団体と連携し、特別養護老人ホームや障害者の小規模作業所、養護学校での交流・支援活動や、自閉症の子どもの託児活動等を行っています。

●自分とは違う相手と出会い、つながることのよろこび

インターアクト部の活動では高齢者や障害者等「自分と何かが違う相手」と向かい合うことにより、ほとんどの部員は当初、相手とどう向かい合ったらいいのか、とまどいや不安を持ちます。しかし、活動を通じてお互い知り合ううちに、徐々に「同じだ！」との感情が育まれ、心を通わせていきます。

部員の山口さんは、特養での活動を行う中、構えがなくなると、不安だった活動が逆に「楽しくて仕方がなくなった」といいます。相手にも山口さんの心の変化が伝わり、訪問した瞬間にとびきりの笑顔を交わし合える関係ができていきました。山口さんはそれを「自分の心が相手の心と同じ高さになったと実感した」と表現します。

「フィリピンの少数民族アエタ族の子どもを対象とした青空教室（識字教育）」

また、フィリピンの火山灰地の緑化活動に向けて「葛」の種を集める活動を行うプログラムでは、ともに種を集める高齢者から「この年になって国際協力ができてうれしい」と、逆に感謝されています。

●「笑顔は飛びっきりの言葉！」
～お互いから学びあう異文化交流～

インターアクト部が海外ボランティア活動として行っているフィリピンの少数民族アエタ族への支援活動は、お互いから学びあう異文化交流につながっています。

実際にフィリピンを訪れて行う主な活動は、緑化に向けた植林活動や子どもへの識字教育等ですが、言葉や文化の違いから、当初の予定どおりには運びません。言葉が通じない中、全身で相手を理解しようと努力し、プログラムを組み換えて試行錯誤する中、徐々に相手の反応から手ごたえをつかんでいきます。最終的にはアエタ族の村人とともに笑いあい、深く心を通わせることができ、プロジェクト自体の成功のよろこびだけではなくて、つながりあえたことのよろこびを共有できます。

お互い違うからこそ、通じ合おうとするし、お互い違うからこそ、通じ合えたときのよろこびは大きい。インターアクト部は、今日も熱い「ハート」で、世代、文化、国境を超えて、お互いが元気になり、育ち合える「笑顔の輪」を広げています。

問い合わせ先
●県立篠山鳳鳴高等学校（顧問:久保哲成教諭）
〒669-2318兵庫県篠山市大熊369
TEL:079-552-0047
URL:http://www.hyogo-c.ed.jp/~homei-hs/

高校生ボランティアと 国際協力団体との“いい関係”

「高校生だからこそできることがある」

（特活）IKGS緑化協会 事務局 瀬川 千代子さん

インターアクト部のフィリピンでの海外ボランティア体験活動は、受け入れ施設や駐在員を持ち、現地でプロジェクトを行う国際協力団体の協力によって行われています。高校生の海外ボランティア活動を支える（特活）IKGS緑化協会の事務局、瀬川千代子さんにお話を伺いました。

Q（特活）IKGS緑化協会の活動内容は？

A 一九九二年に山南町で行われた講演会で「やっかいもの扱いの葛も、活かし方次第で火山灰砂漠の緑化に役立つ」ということを知り、本会の前身「国際葛グリーン作戦」を立ち上げました。立ち上げ初期のフィリピンピナトゥボ火山被災地へ地元の学校や地域団体と連携して葛の種を集めておくる活動から、現地に駐在員を派遣、現地のNGO団体と連携して葛による地力回復と植林・農業プロジェクトを行うなど、活動はどんどん発展しています。現在はNPO法人格を取得、「IKGS緑化協会」と改名して、フィリピン全土の森を守る少数民族を支援し、彼らと連携して緑化を推進する体制を整え、フィリピン・イフガオ州で世界遺産の棚田を守るための植林活動を中心に活動しています。

Q 海外ボランティア活動に高校生が関わる意義は？

A 高校生のみなさんは非常に柔軟で、短い期間にもかかわらず、ハイスクールに通う同年代のアエタ族の若者の「パートナー」と心を開きあい、親密な関係を築いてしまいます。これは、わたしたちスタッフにはなかなかできないことです。高校生自身もアエタ族との出会いや活動をともにすることから大きな学びがありますが、アエタ族の若者にとっても、日本の若者との交流は非常に大きな刺激となっており、交流後熱心に勉強に取り組む若者も多くいます。

また高校生は、アエタ族のパートナーと一緒に、現地で緑化のための植林活動に関わりますが、プログラムを通じ、現地の住民がIKGS緑化協会が現地の生活協同組合とともにすすめている緑化活動を理解し、関わるきっかけとなっているように思います。

編集後記

異なる性質を持つ団体が共通の目標で、つながり、これまでできなかったことができていく。活動の直接の成果も、活動を通じて得た「経験」も「つながり」も、みんな財産になっていく…ひょうごボランタリープラザでは、そんな協働による活動を応援しています。

身近な『協働の取り組み』情報を紹介ください！

連絡先:ひょうごボランタリープラザ（担当:荒木）
TEL:078－360－8845
E-Mail:c-araki@hyogo-wel.or.jp